

平成22年6月26日現在

研究種目：基盤研究（C）  
 研究期間：2007～2009  
 課題番号：19520105  
 研究課題名（和文） 鎌倉仏教の成立と仏師快慶—信仰のイメージ化とその創作に関する総合的研究—  
 研究課題名（英文） Formation of Kamakura Buddhism and a Buddha Sculptor Kaikei : Study on Images of Belief and their Makings  
 研究代表者  
 青木 淳（AOKI ATSUSHI）  
 多摩美術大学・造形表現学部・准教授  
 研究者番号：00305806

研究成果の概要（和文）：鎌倉仏教が成立する背景にある信仰の問題を、南都東大寺の焼失から復興造営にかけての文化事象との関係から検討した。特に仏師快慶と関係の深かった俊乗房重源（1121～1206）と浄土宗の開祖法然といった僧侶たち並びにそのネットワークの中で活躍した人々との関係から信仰圏並びに快慶による造像圏の形成過程を明らかにすることを目的とした。

研究成果の概要（英文）：At the end of Heian Period, Nara Toudaiji was burnt down and its reconstruction took place. Concomitantly Kamakura Buddhism was formed. It could be referred to as a kind of Renaissance in Japan. This study explores the works of Kaikei who lived through such a period and his human and religious network.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	800,000	240,000	1,040,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	2,100,000	630,000	2,730,000

研究分野：日本美術史、宗教文化史

科研費の分科・細目：（分科）哲学、（細目）美学・美術史

キーワード：快慶、法然、重源、像内納入品、鎌倉仏教、勸進、結縁

## 1. 研究開始当初の背景

従来、鎌倉仏教の研究はその成立期において、いかに旧仏教と一線を画し、新たな思想

振興を生み出したのかという問題に終始してきた。

しかしながら、近年、各地に伝来する仏像

の像内納入品資料から、中世に活躍した人々の信仰の様子や仏師をはじめとする職能民たちがいかにその活動の場を確保し、新たな造像活動を展開していくのかということが明らかになりつつあった。

そうした点に着目して同時代に発生する新仏教の成立とそれに連鎖して生み出された鎌倉彫刻の新鮮さに通底する人間の精神活動の在り方について、言及を試みたいと考えた。

また、重源の入滅と前後する時期における快慶の作品並びに作風の変化についての研究を進め、特に高野山、大阪、滋賀といった地域に伝来する作例について調査を行った。快慶の場合、快慶の署名のある作例であっても、その作風は大きく異なるものも見られ、この問題を快慶における工房作の問題と捉えるか、または純粋に仏師としての作風の変遷の中で位置づけるべきなのかという議論を、弟子の行快の作品などとの比較から検討を試みた。行快の場合、滋賀・阿弥陀寺阿弥陀如来像の造像では快慶とも縁の深い安居院の澄憲、聖覚、大報恩寺義空といった人々と交流していることが既に確認されており、いずれも『法然上人行状絵図』などにその交流の記録が確認される人々であることから、今回の像内納入品が確認されたことにより、今日的な意味での宗派を超えた部分での僧侶や仏師のような職能民が交流していたことが明らかになった。

## 2. 研究の目的

恐らく、鎌倉仏教においては、造像起塔信仰の否定や古代的な作善業の無意味化という命題が大きく取り上げられてきたが、その一方で運慶や快慶の活動は日本全国に及ぶまさにプロパガンダとも言うべき指向性を持ったものであった。

それは、芸術の世界においても言えることで、鎌倉時代以降、その様式は各地で踏襲された。そうした問題を四国九州、中国地方などにおいて、調査を進めた結果、快慶作の岡山・東寿院阿弥陀如来像などからは、法然ゆかりの人々の人名や遺品が確認された。こうした資料の解析を通じて、鎌倉仏教成立の背景にある信仰と芸術の関係について、検討を試みた。

更に、快慶並びに快慶工房の作品は日本各地に伝来していることが確認されているが、いわゆる安阿弥様と呼ばれる快慶様式が拡散する過程で、慶派の仏師ばかりではなく、院派や円派の仏師たちが十三世紀後半には同様の阿弥陀像を造立していたことの意味について検討を進めてみたい。

## 3. 研究の方法

具体的には、次にあげるような二つの視点から問題に取り組んだ。

日本各地に伝来する快慶の仏像並びにその工房作の分布並びに造像の背景にある人々の関係を、像内納入品資料などを基に解析した。

また、高知県、岡山県、香川県、滋賀県、和歌山県、栃木県、茨城県、静岡県、愛知県などに伝来する快慶の作例やその工房作が、いかにしてその場所にたどり着き、信仰を集めてきたのかという問題を明らかにすることが挙げられる。

## 4. 研究成果

本研究では、以下のような研究の成果を発表した。

平成20年9月高知県須崎市で確認された「鎌倉時代の大日如来像調査報告書」(須崎市教育委員会発行)を発表した。この作品は鎌倉時代中期に造立されたもので、様式的に

は運慶の工房作にあたる栃木・鏝阿寺大日如来像や東京・真如苑所蔵の大日如来像に類似したもので、やや瘦身であることからその作者を湛慶工房の一人として紹介した。高知県下には雪蹊寺仏像群や佐川町大善寺阿弥陀三尊像、安芸市妙山寺観音菩薩像、高知市安楽寺阿弥陀如来像といった作例が知られているが、これなどの仏師を通じて文化が各地に伝来したことを示す資料と言えよう。

この大日如来像に関する研究の成果として、「高知県須崎市上分大日如来像の周辺」(多摩美術大学研究紀要 2009) を発表し、合わせて鎌倉時代初期における慶派仏師による大日如来像の系譜化を行った。

更にこの大日如来像は高知県香美市立美術館において公開された。(平成 20 年 9 月～11 月 青木 淳 監修)

快慶とその造像圏に関わる研究としては、近年その存在が確認された快慶作例のうち京都市百万遍智恩寺阿弥陀如来像、京都市泉涌寺悲田院宝冠阿弥陀如来像に関する調査と研究を行った。前者は造像銘等の記事が確認されていないものの、かつて申請者が調査を行った京都市遣迎院阿弥陀如来像との間に造形上の類似点が多く認められるもので、その表面に施された截金の状態などの比較を行った。後者は大津市歴史博物館による内視鏡調査により、「安阿弥陀仏」銘が確認されたもので、快慶の初期作品であることがわかった。同形の作例は、広島耕山寺の作例や、滋賀県石山寺大日如来坐像、東京芸術大学大日如来坐像などとの比較により快慶並びにその工房作の問題について今後、注目すべき作例であることが確認された。

またフランス、ギメ美術館が所蔵する鎌倉時代の四天王像、京都・大報恩寺十大弟子像などについても調査を進めた。こうした一連の調査により、快慶作例の分布圏と造像圏の

背後に想定されるものとして、教団成立間もない時期の法然の浄土宗、大報恩寺議空を中心とする天台関係の人師の動向、また天台座主慈円と四天王寺、青蓮院といった場所を契機とした快慶をめぐる人間関係が本研究により、より明らかにされたものと考えられる。また快慶の周辺の肥後別当定慶、湛慶、行快、宗慶といった仏師達による作品と快慶作例との関係を造形並びに人間関係の上からひもとく作業を行った。今後、日本各地に伝来する快慶ならびにその工房作と地域性の問題などについて研究を進めてみたいと考えている。

岡山県東寿院阿弥陀如来像の像内納入品資料の調査を行い、中でもその関係者として慈円の弟子で、天台座主を務めた真性の結縁や法然門下の感聖の名が確認され、前者は開眼の導師として、後者は「天台宗学生感聖」という書名から初期浄土宗教団においては法然の高弟の一部の人々は浄土宗の僧という肩書ではなく、天台宗の僧侶と言う身分にありながら、法然の弟子としての位置づけがなされていたことが確認されるようになった。

また、日本宗教文化史学会において「石清水八幡宮と快慶」と題した発表を行った。これは、洛南の石清水八幡宮に伝来する阿弥陀如来像が快慶の工房作であることが近年確認されたこと、また、既に焼失してしまったが、石清水八幡宮別当祐清が検校の時代に仏師快慶が願主となって同宮に施入した僧形八幡神像(画像)との関係、そして法然門下の源智が石清水八幡宮の別当家と結縁的に深い関係があったことなどを紹介した。

これらの研究成果は、22年度日本宗教文化史学会において「運慶と快慶-像内納入品にみる二つの個性-」(9月同志社大学)で報告するほか、2011年度地方仏フォーラムにお

いて「運慶時代の地方仏」（東京国立博物館）と題した講演を行う予定である。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計3件）

青木 淳、『松本平の古きほとけたち』、松本市美術館 特別展図録「松本平の神仏 百柱をたてる」、pp. 12-14、2007年

青木 淳、『瀬戸内沿岸におけるにおける仏像の造像圏に関する研究』、第2回瀬戸内海文化研究報告書、2008. 5、2008年、pp. 8-114

青木 淳、『高知県須崎市上分大日如来像の周辺』、多摩美術大学研究紀要、査読有り、23巻、2009年、pp. 97-108

〔学会発表〕（計2件）

青木 淳、仏師快慶と承久の乱の周辺、日本宗教文化史学会、2007年11月16日、龍谷大学

青木 淳、瀬戸内沿岸におけるにおける仏像の造像圏、第2回瀬戸内海文化研究報告会、2008年5月17日、サンポートホール高松（高松市文化芸術ホール）

〔図書〕（計4件）

米倉 守／辻井 喬／青木 淳ほか編  
松本市美術館 特別展図録「松本平の神仏百柱をたてる」、2007年、199頁

青木 淳、和泉書院、千田稔『関西を創造する』所収・青木 淳「俊乗房重源をめぐる断想」、2007年、405頁

青木 淳、須崎市（高知県）教育委員会、『須崎氏上分大日如来像の周辺調査報告書』、2008年、6頁

青木 淳、新纂浄土宗大辞典刊行会、『新纂浄土宗大辞典（快慶/運慶/行快/明遍/一言法談などの項目）、2010年、頁数未定

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

青木 淳 (AOKI ATSUSHI)  
多摩美術大学・造形表現学部・准教授  
研究者番号：00305806